

2・2 流路の変遷

(この項「呑川は流れる 昭和41年」から転載)

(この項「呑川は流れる 昭和41年 16p以降、明治・大正時代の土地利用」から転載
斜体活字部分は転載にあたり補記。原文の誤植が明らかな部分は訂正しました。)

2・2・1 流路の変遷(上流) (元本では16p～)

I. 明治大正頃の呑川の流路

呑川は小流であり屈曲も多く、主として灌漑用に使用されていたのである。

当時の流路は現在のような直線的な流れではなかったのである。石川橋のところから現在の池上線のガードのところを通って、尚徳学園(現・聖徳学園)の西側を道に沿って流れていた。石川橋の南には水車小屋があり米を搗いていたという。東亜燃料アパート(現・フェアロージュ 南雪谷アースコート)の西南に30cmぐらいの丸太を三本ならべて渡河に利用し、これを山下橋と呼んだ。又そこには田に水を引く堰があったが今(昭和41年当時)はその面影も残っていない。

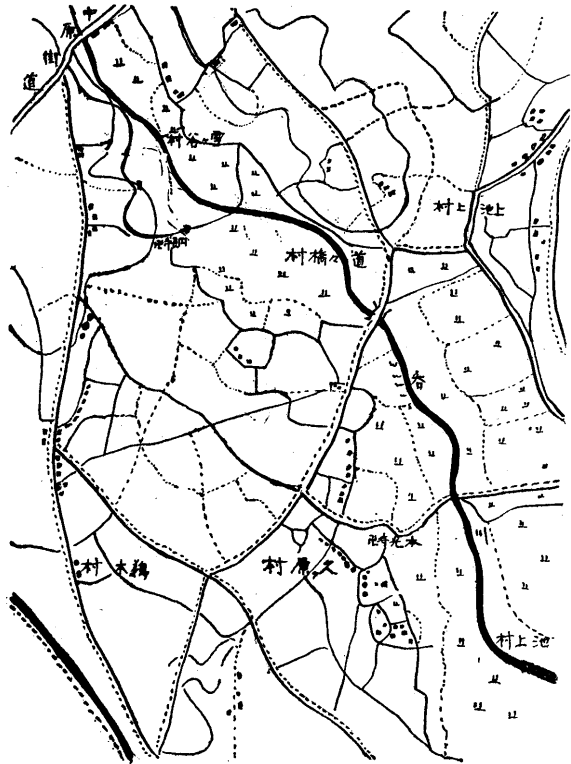
日冷アパート(現・ニチレイ研修センター スコレ雪谷)の東南に巾員3mの土橋があり、そのあたりでは川巾は5m、水深1.5mぐらいだった。

この橋は雪谷のほぼ中心で、荷馬車の通れる大切な橋になっていた。川はそれから大きく東に曲がって今の日本航空の Apart(現・パークハイム東雪谷)の方向に向い、更に南に大きく折れて道々橋に流れていた。

道々橋から現在の池上橋付近までは比較的屈折も少なく、ほぼ北から南に向かって流れていた。

当時の呑川は、かつて飲料水としても使用されたというごとく、清流であってその水流には今は見ることができないような、コイ、フナ、ハヤ、ヤマベ、メナゴ、ウナギ、ナマズ、エビ、メダカ、カニ、カメ、スッポン、シジミなどがすんでいた。又、川ぞいの水田には、白さぎなどの鳥がとんできたそうである。

一見のどこに見えるこの小流も、当時は水量も少なく、引水しても沿岸の田を十分にうるおすことができず水争い等色々な問題を含んでいたのである。



明治時代の呑川の流路

II. 昭和になってからの呑川の流路

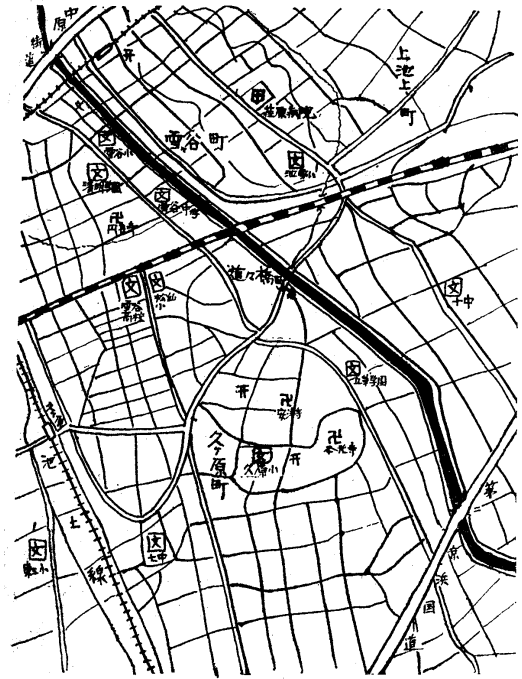
関東大震災後、東京の周辺地区は急激に人口が増え、交通の発達は更に之に拍車を加え呑川周辺も次第にその様相を変えていった。

このような現象は、従来の灌漑用としての呑川の性格を、排水路としての性格へと変化させていった。又周囲の住宅化は必然的に田畑の減少を意味し、雨水は地面に浸透せず、しばしばはんらんを起すようになったので、流路の改修は切実な問題となってきたのである。

改修工事は当時の測量技手として直接工事に関係した中山松一氏によると400haにもおよび、池上本町、池上、久ヶ原、道々橋、雪谷、石川の各町が統一し、池上西部耕地整理組合を結成し、改修を始めたのだそうである。

幾多問題はあったが、農民達の協力により、この改修工事は完成し、かつて屈折の多かった呑川の流路はほぼ直線となり、現在の様相を呈するに至ったのである。

工事完了後、地元民と青年団の奉仕により、桜樹二千本を両岸に植え、呑川の桜（長栄桜）として、親しまれたが、今は影もない。



現在の呑川の流路

2・2・2 流路の変遷(中流)

中流域では、地図を比較してみても、流路そのものに大きな変化をみることはできない。しかし、部分的には変化した点があるので、耕地整理以前の呑川と、現在とを部分的に拡大した地図で対比しながら、みていきたい。

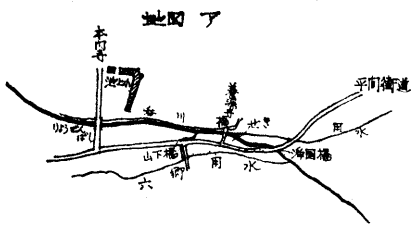
I. 稲荷橋、浄国橋間の変化

(1)初期には用水路という性格のためか、屈曲が多かったといわれるが、地図上ではみとめ難い。

(2)その後耕地整理の伴う改修で直されたとはいえ、戦前の呑川には、まだ地図アにみられるような屈曲が残っていた。

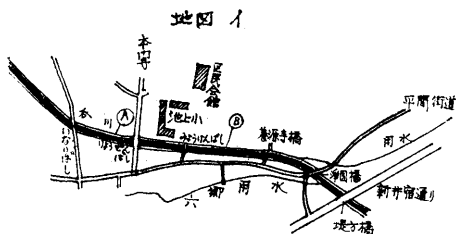
・霊山橋、妙見橋間は、池上小の裏門あたりからは、現在道路のあたりを川が流れ、妙見橋の付近は宅地であった。

・池上本町297あたりのところから地図アで山下橋とあるところを通り、六郷用水へ分水していた。現在はつぶしてしまい、あとかたもない。



分水していた。現在はつぶしてしまい、あとかたもない。

・養源寺橋の下流で流れは二つに分かれ、一つは用水として市野倉から新井宿の方へ流れていた。呑川の本流は養源寺橋下流で急カーブをえがいて平間街道ぞいに流れ、浄国橋をこえてからは、ほぼ現在と同じ流れになっていた。養源寺橋のすぐ下流にはせきがあり、そばの小屋に番人をおいて、水量を調節したという。



・戦後はたびたびの改修が行われ、流路はだんだんまっすぐに近くなった。

霊山橋、浄国橋間もできるかぎり直線になり、そのため宅地も大分けずられた家もある。また照栄院から養源寺橋前にかけてのように、以前の川がうめたてられて道路になった場所もできてきた。

また養源寺橋から浄国橋までの間は、分水した用水路にそって呑川を通し、以前の流れは宅地になってしまった。

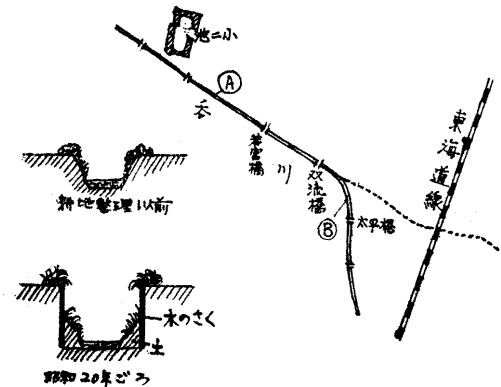
II. 中土手について

地図上では、はっきりした記載はしてないので、古老の話や池上町史を参考にした。

(1)現在の池二小のやや下流から、東海道線ぎわまでのあたりに、位置ははっきりしないが、およそ400m近い中土手が、川の中に築かれていたという。巾はおよそ2.5mほどで、草がしげり、立木も生えていたそうである。(地図 中土手 A・B間)

その中ほどから大森方面へかけて用水が分水されていた。そのために中土手がつくられたともいわれる。しかしその用水は、大森方面が早くから宅地化されたために、埋められて、現在は下水の一部として残っている程度である。

(2) この中土手のために、池上町はすぐ出水し、蒲田町はさえぎられて出水が少ないので、その撤去については、両町の争いのたねとなったようである。昭和6年には、そのため警察の出動さえみるほどの騒ぎもおこしているが、東京府当局の努力により解決して、中土手は撤去され、沿岸も改修された。



その他川巾等はどこも広がっている。戦前の中流域は木柵の護岸工事が主で、草も生い茂っていた。水量は少なく、歩いてわたれる程度であるが、水はきれいで、昭和10年ごろでもカイボリをすると、ずいぶん小魚がとれたのを記憶している。水利組合の人たちで一年に一度土堤の土あげや草とりをやったといわれる。

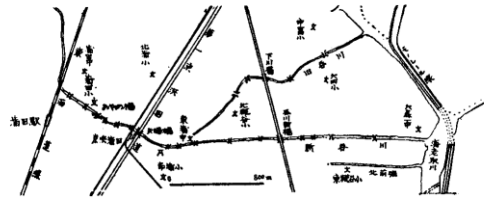
それが昭和20年以後の度々の改修により、川巾は二倍以上、深さも土堤を高くし、川底をほり、二倍以上にひろげられてきた。また護岸も鉄筋コンクリートによって行なわれ、今ではどこをみても、昔の用水として親しまれた呑川の面影を、さがし出すことはできなくなっている。

2・2・3 流路の変遷(下流)

呑川の流路は、現在東海道線をすぎて蒲田小学校前までは直流し、あやめ橋～夫婦橋～東蒲中付近までやや蛇行して流れている。その先新呑川は河口まで直流している。旧呑川は現在は閉鎖されており、呑川と流路は続いていないが、旧呑川排水場橋～下川橋～呑川橋付近までは大きく蛇行して、東京湾に流れこんでいる。現在（昭和41年）では東邦医大方面からの排水溝が旧呑川の水源と変わっている。このような流路を辿っているが明治初期の地図をみても余り大きな変化はみられない。下流部においては昭和10年に完成した新呑川の開削が大きな変化である。この水路の開削によって呑川の本流は東へ直流し、海老取川に流込んでいるのであるが、旧呑川はそのまま存置されていた。



このように自然の流路をそのまま生かして河道の整正が行われており、現在の流路と余り大きな差異はみられないようである。しかしながら改修によって自然の流路にみられた蛇行が少なくなっていることも事実である。例えば夫婦



橋下流は大正6年の地図でも流路は南下しており、北野神社の南側を流れているが、昭和3年の地図とこの付近を比較してみると夫婦橋よりの流路は北にかたより、神社の北側を流れている。そして昭和3年の地図を見るときとの流路と見られる三日月型のくぼ地が残されている。このような河道の変化はもちろん人工的になされたものであり、極端な屈曲部の改修が行われていることが察せられる。このような改修は夫婦橋上流にも認められる。夫婦橋のすぐ上流部では直角に近い屈曲があったが、現在ではこのような屈曲した流路はみられない。

このように流路については大きな変化はないが、河道の人工的修正がされていることは明治以降においても認められ、川に対する人々の働きかけを伺い知ることができる。

2・2・4 新呑川の開削 (元本では42p～)

I. 新呑川開削の要望

呑川は本区をほぼ南北に縦貫し、屈曲の多い流れであることから、雨が降るとしばしばはんらんし、又水量が少ないことから、かんばつ期には水がれして水争いの原因ともなり、治水は古くから住民の切望する問題であった。

- (1) 呑川の治水問題は、明治・大正のころまではもっぱら農業中心に考えられてきた。
- (2) 時代の推移とともに、川の流域は急速に発展し、農地は宅地と変わり、それまで灌漑用として重要であったものが、排水路として重要なものになり、排水をよくして、水害を予防するという問題になった。
- (3) この問題の解決のためには、関係筋の一貫した計画の下に工事が行なわれなければならないのであるが、当時とはかく意見の一致を欠いたため、しばしば問題をおこした。
 - イ. 池上堤方の中土手撤去（大正15年以來）の問題をめぐり、池上・蒲田両者の間に昭和6年10月、警官の出動を見たほどの紛争があった。（池上町史）
 - ロ. 夫婦橋上の堰はもとは、いわゆる土手を築いた単純なものであったけれども、耕地整理と同時にこれをコンクリートとし、その分岐点において送水の調整をはかっていた。しかし蒲田町の発展とともに、豪雨出水の場合には、コンクリート堰堤の障害によって、浸水の惨害がひどくなる恐れがあったため、再三下流羽田町側に折衝して、昭和4年秋、完全にこれを撤去した。（蒲田町史）
- (4) その後も、大雨の降るごとに出水に見舞われ、呑川は依然として、町民の悩みのたねであった。

II. 新呑川開削決定までの経過

昭和6年12月、こう水はんらんの防止を主眼として、下流を運河として舟運の便をはかろうとする計画のもとに、夫婦橋下流から羽田藤兵衛藩にいたる新開削工事が実施される運びとなった。経過を略記すると、

- (1) 大正14年11月21日荏原郡町村会議員連盟「土曜会」は「呑川その他の河川の改修は、原則として東京府費支弁とすべし。分けても呑川らの如きは急速に実施すべく、東京府会に提案されんことを望む。」と決議。
- (2) 一方蒲田町に於いても他町村以上に呑川改修の要望が切なるものがあったため、同年12月14日の蒲田町会で「呑川府費支弁請願に関する決議案」を議決。
- (3) ただちに東京府に猛運動を開始し、同月23日この決議案は東京府会を通過。
- (4) しかも、その後2年経過しても大井の立会川が府費支弁となったにもかかわらず、大森の間川及び蒲田の呑川は除外された。
- (5) 自来、毎年連続的に運動を続けた結果、昭和6年12月の東京府会において、昭和7年

よりいよいよ府費をもって呑川改修を断行するとの決議を行ない同年11月19日より工事に着手した。（以上蒲田町史より）

藤兵衛濤

当時北岸は荏原郡大森町、南岸は同郡羽田町、下端は東京湾に連なり、上端は現末広橋の及ぶ幅二、三間の堀であった。春は老松が連なる堤から女房、こどもが玉網をひろげ流れよってくる海苔をひろい、夏は海苔ひびとよしず小屋に太陽が激しく照りつけ、よしきり（小鳥の名）は葦のしげみの中でやかましく鳴きたてる。

秋は穴守も川崎大師の家屋までもさえぎるものなく眺められ、枯野に夕潮が満々とさしこみころ、夕映の富士は美しく秋空に姿を浮かばせる。冬は海苔をつんだ小舟がすべるように舳をならべて帰ってくる。

藤兵衛切堀とはこのように静かでささやかな水路であり、さながら広重の絵を見るような情景であった。（小沼虎之助誌）

（開発者 羽田藤兵衛。宝暦13年1月5日没 1736年）